

英語科教育実習における Diary Studies の試み

深沢 清治・野澤 久美*

(1994年9月9日受理)

A Pilot Study of Analyzing Student Teachers' Diaries in English Language Teaching Practice

Seiji FUKAZAWA and Kumi NOZAWA

Diary studies have been well established as a research tool in second language learning/acquisition studies, and recently their use has been extended to the field of teacher education. Writing journals or diaries provides an excellent opportunity for students to observe themselves, collect data about their own teaching, and to use that data for self reflection and hence their professional growth.

The present paper analyzes the daily reports written by 11 student teachers during their two-week teaching practice. As a result, some positive changes in their approach and focus of attention in the classroom have been noticed to emerge. Finally, it is suggested that this reflective approach be applied to future teaching practice or teacher education program coordinated between university and the attached school.

I. はじめに

教師教育プログラムにおいて教育実習の持つ意義はますます大きくなりつつある。豊かな実践力を備えた将来の教師を養成するためには、教師教育カリキュラムの中でコース履修を終えた最終段階としての位置づけを持つ従来型の「完成型」教育実習に対して、教育実習を教師教育カリキュラムの中間点と考え、教育実習前の事前指導に加えて、実習体験からのフィードバックをもとに自らの教育実践を研究対象とできる自立的教育実践家を養成するための「研究型」教育実習へと視点を広げていくことが求められている。これを実現するためには、教師教育に関わる全ての者が実習の事前・事中・事後指導の全ての段階において連携を取り合い、これまで附属学校および実習委託校

に任せきりになっていた実地研究すなわち教育実習を、大学、委託実習校、教員志望学生の三者による共同作業ととらえ直すことが必要であろう。

一方、1980年代以降、教師教育を知識・技術伝達を中心とした training から効果的な授業の原理・原則の理解と応用力の養成を目指した education/development ととらえようとする視点への移行がみられる。教室という環境での活動の重要性が再認識され、action research などさまざまな教室を研究の出発点とした分野が現れてきた。しかし、これまでの授業研究の多くは、専門家による分析を出発点としたものであった。そこで、将来にわたって、教師自ら授業改善を目指すためには、授業診断のための方策として、授業者自身の授業観察・批評をもとにした Diary studies の持つ意義は大きいであろう。

本研究は教育実習による授業反省日誌をもとに

* 広島大学附属東雲中学校

した Diary Studies の試みであり、日誌の分析を通して、教育実習生の授業観察の視点の特徴、実習期間を通しての英語授業に対する自己・他者評価の際の視点の変化、および今後の日記研究の方向について概観することをその目的とする。

II. Diary Studies とは

1. 定義

外国語学習のプロセスにおいて、学習者が自己の学習・習得を振り返ったり、外国語プログラムの有効性について評価するために書き残した記録を利用することは近年、日記研究 (Diary Studies) と呼ばれ、外国語 (第2言語) 教育学の研究方法として、注目されつつある。Richards *et al.* (1992:107) において、日記研究は次のように定義されている。

(in research on first and second language acquisition) a regularly kept journal or written record of a learner's language development, often kept as part of a longitudinal study of language learning. With a diary study, the researcher records examples of the learner's linguistic production in as much detail as possible, as well as information about the communicative setting involved (i.e. the participants, the purpose etc.). Diary studies are often used to supplement other ways of collecting data, such as through the use of experimental techniques.

このように、当初の日記研究は第2言語習得研究の一環として、学習者の言語発達のプロセスを探るための手段であった。これに対して、Bailey (1990: 215) が、

A diary study is a first-person account of a language learning or teaching experience, documented through regular, candid entries in a personal journal and then analyzed for recurring patterns or salient events.

と述べるように、日記研究は対象として学習者だけでなく教師をも含み、さらに、授業研究 (classroom research) という研究分野の確立により、教師による自らの授業の内省に立った reflective teaching のための方法として、教師教育プログラムの中で注目を集めつつある。

2. 日記研究の目的別分類

日記研究には、授業での出来事や考えを後の反省、内省のために記録すること、さらに「書く」というプロセスが教育活動についての自らの発見を促す、という2つの目的があると思われる。これまでの日記研究の結果の利用について、McDonough (1994) は次の3つに分類している。

1) 教育手段としての利用

学習者に授業に関しての日記を書かせ、教室活動に対する感想や好みや学習の進捗についての情報を得ようとするもの。

2) 研究手段としての利用

学習者の日記から学習者自身の学習スタイルや学習方略を明らかにしようとするもの。

3) 教師教育の手段としての利用

教師教育プログラムの課題として日記研究を位置づけ、教育実習や履修コースについてコメントさせるもの。

このうち、教育手段としての利用は、日記研究という研究分野の出現よりもはるかに早く、さまざまな目的、規模、方法で個々の教師が授業の自己評価や学習者の理解度の確認をねらったフィードバックの手段として取り入れてきたものである。また、研究手段としては Bailey (1983) の研究のように、研究者自身が学習者として大人のフランス語学習クラスに参加した際の競争心や不安について日記につけたものを分析した例もある。さらに近年、注目されているのは、教師前教育の一環として、教育実習中に実習生に日記を書くことを課し、教室での実践を振り返り意識化させる方法である (Murphy-O'Dwyer 1985; Bailey 1990; Thornbury 1991)。

こうした教育実習生による日記研究を含めて、これまでは学習者の日記を対象とした研究が中心であったのに対して、Jarvis (1992) や McDonough (1994) の指摘するように、in-service コースの中で日記研究を取り入れているような、ある程度の教育経験のある教師による平素の授業実践に基づいた日記を分析し、そこから教師の self-development へとつなげようとする研究は数が少ない。こうした研究方向の指摘は近年の classroom research に端を発するものと考えられ、teacher-as-researcher の方向を進めるためにも、今後の研究が期待される側面である。

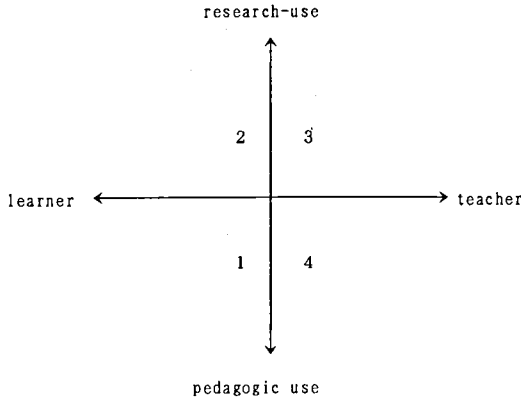


図1 日記研究の目的別分類

こうした日記研究のこれまでの流れを概観すると、日記を書く側（教師・学習者）と日記分析の目的（教育・研究）によって、図1のように分類することが可能であろう。さらに、そのうち、今後の進展が期待される分野は、上図の第3領域に属する実践経験のある教師による日記の研究的利用であろう。

III. 日記研究の方法

日記研究には、確立された方法論があるわけではないが、学習・教育日記の研究過程として Bailey (1990) は日記に書き込む、およびその記述をもとに分析を行う、という2つの過程に分別し、実行のプロセスを図2のようにチャート化している。

さらに、日記を書く際の留意点として、できるだけ授業直後に、書くことに集中できる時間を持って、十分な時間をかけ、それが出来ない場合は興味のある部分に絞って、さらに、はじめは文章のスタイルや文法・構成は気にせず書くこと、を挙げている。

IV. 教育実習生の授業批評日誌をもとにした diary studies の試み

本研究においては、英語科教員志望学生の教育実習を機会として、日記研究の可能性を探ろうとした。分析資料、方法、結果は以下の通りである。

1. 目的

本調査は、教育実習生の授業批評日誌をもとに、教育実習を通して実習生が授業に対して持つ視点

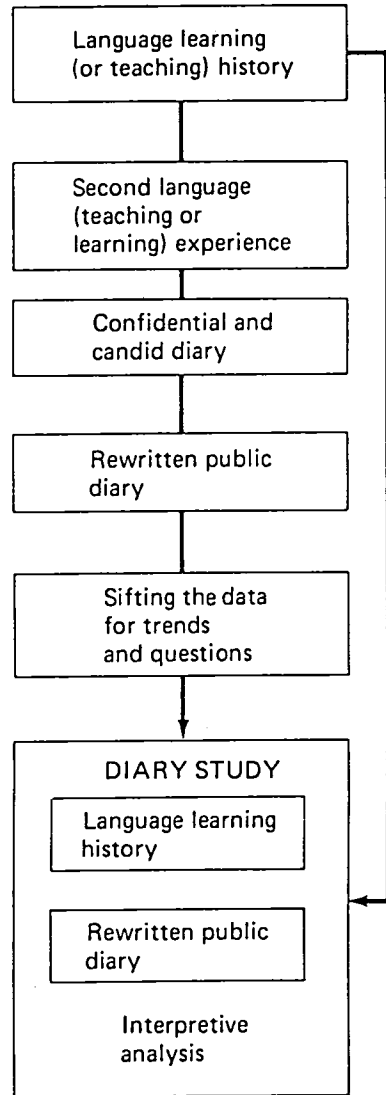


図2 日記研究のプロセス

の変化を見ようとする試みである。そして、日誌の分析を行い、その結果をもとに学部における英語科教師教育と附属校における教育実習との間の有機的な連携を図り、さらに実習事後指導に資することを目的とする。

2. 分析資料

今回の分析資料は、広島大学学校教育学部（小学校教員養成課程）4年次学生11名が、広島大学附属東雲中学校で平成5年11月8日～11月20日の2週間にかけて行った教育実習期間の後に附属学校に提出した、次のような様式で書かれた各実習生による授業後の批評会の記録である（例参照）。

表1 教育実習生の日誌に見られる記述の観点別分類

	A	B
11月9日	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介からうまく本時のねらいにつながった。 	<ul style="list-style-type: none"> 班で言わせた時、評価すればよかった。 作業のすんだ生徒へ次の指示を。
11月11日	<ul style="list-style-type: none"> 展開の場面は、もっとスピードアップして 初めての、(最上級の) -est もさらりと入れたうまい導入だった。 展開のあとの本読みは、流れを切らずに続けて読ませたかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 何回読めたか、を生徒に聞くことは評価の一つ。
11月12日		<ul style="list-style-type: none"> 班で活動させたら、班に評価を。
11月15日	<ul style="list-style-type: none"> 最初の生徒のあいさつがきちんとできていなかった。ここでビシッとさせたら、授業の流れにめりはりが出たかもしれない。 Oral Introduction がうまくできた。 適切なピクチャーカードによる導入が徹底していたので、その後の活動がうまく進んだ。また、そのピクチャーが展開の場面まで活用できたのは、とてもよかった。 静かだけれど、集中していないムード。 	<ul style="list-style-type: none"> 練習時間をとった後に、「読めません。」といった生徒への指導は、授業をごまかさない姿勢で、とてもよかった。 生徒への自然な言葉かけができていた。 「～してください。」ではなく、「～しましょう。」で、学習しようとする態度を育てたい。
11月16日	<ul style="list-style-type: none"> 時間設定がまずい。 本読みを次の活動へつなげるには？「〇回読んでみよう」の目標達成できなかった子への示唆に富む授業の流れを。何回よりも何に気をつけるか、だ。 指導過程の節目でのねらいがわからない。 	<ul style="list-style-type: none"> 評価の言葉が具体的でよい。 「自信をもって言うと、よくなるよ。」 「usually, always などを使うと、表現が豊かになるよ。」
11月18日	<ul style="list-style-type: none"> まとめよりも、展開の活動を増やしたい。 音→writingの原則は、大事だ。 書くことの助けになるような、音の入れ方を考えたい。(生徒には、やはり書くことは抵抗があるようだ。) 	
11月19日	<ul style="list-style-type: none"> プリントの扱いに時間がかかりすぎた。宿題にするなど、臨機応変の対応がいる。 既習事項のおさえの授業展開になりえていない。 説明口調の(いつもと違う)授業の流れだ。 指導案通りに流すことが、何よりとは思わぬが、無駄なことへの介入が多く、指導案を無視した授業展開となった。 「感情をこめて読む」ことのみ強調しすぎて、教師主導の流れとなった。 	<ul style="list-style-type: none"> なかなか答えの出せない生徒を待つこと。 生徒に言葉かけが少なすぎた。 生徒全員を授業に参加させようとする姿勢があり、寝ている生徒へも積極的に指導してよかった。 生徒に対して、下手に出すぎ。「この50分は私が指導し切るのだ！」の強い姿勢が絶対ほしい。
11月20日	<ul style="list-style-type: none"> スムーズな導入で、ゆとりをもってねらいに向かっていった。 班活動、個人活動の使い分けが的確。 	<ul style="list-style-type: none"> ペア発表に対して、一人ひとりに評価できていた。 全員に発表させる配慮があった。

英語科教育実習における Diary Studies の試み

C	D
<ul style="list-style-type: none"> 生徒自身の生活を表現させるべきだ。 leave for と go to の関連をおさえない。 get の既習の意味のおさえができていない。 新出単語をうまくとりあつかうこと。 指導案のねらいは、「言えるように」よりも「使える」の方がよいのでは？ 	<ul style="list-style-type: none"> もっと、手際よく。 話す練習の時に、書かせない指示を。 ペア発表は、起立させて。 板書の工夫がほしい。(こだわりたい) 赤チョークより黄チョークがいい。 リピートの回数の目安は？
<ul style="list-style-type: none"> 効果的なピクチャーカードの利用。 最上級と共に使われる、in～と of～の対比を具体的な例文の中で定着させたい。 最上級と共に使う the にはこだわっていてよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 答え合わせにペアワークを活用したい。 指名に手間がかかりすぎ。 「～してください。」でなく、Classroom English を使いたい。 先生の声が大きかったので、生徒の声も大きく出た。 読むスピードを指示したので、読みやすい。 大事な箇所を、わざと間違えて生徒に気づかせる方法は、効果的だった。
<ul style="list-style-type: none"> 「放課後何をしますか」に対する応答としては、get home ではなく、go home では？ 	<ul style="list-style-type: none"> 先生が問い生徒が答える、という一方通行の練習ばかりだった。 ペア練習の際の指示をきちんと出すべき。 先生と発表者 2 人だけのやりとりにならぬように。 時間内に作業が終わった生徒への指示をしたい。 一度に練習させる文が多すぎる。 音のチェックをきちんと。 ある程度の原理、原則は教えるべきだ。 活動の前には指示、要求を。活動させたら評価をきちんとする。
<ul style="list-style-type: none"> 外国の風物についても、ふれておりよい。 前時の学習事項、call を使っていてよい。 “What do you do?” に対する生徒の「何もしない」という答えは、予想して教材研究しておきたい。 先生が本文を暗記して自分のものにしていったのは、大事なこと。 単語の意味説明ととりあげる例文に矛盾がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 元気のない生徒達に負けず、始終、元気なトーンで引っぱっていったのは、よかった。 Classroom English を積極的に使い、よい。 1対1の活動の発表を、聞いている生徒へ返していく工夫がいる。 読みのスピードを上げることにのみ、気をとられている生徒への確かなアドバイス。 板書に、いきなり Because... は不適切。 初めての一言読みはある程度そろえて。 Listening の前に、聞き取りをポイントを提示したのは、よかった。(集中した)
<ul style="list-style-type: none"> 先生自身が揺れているもの(3単現のs)を生徒に要求しても、定着しない。 生徒の実態をみて、先取りして教えてよい内容があったのでは？ 新出単語の調べがよくできていた。 まとめの問題はポイントをついていてよい。 	<ul style="list-style-type: none"> 全体の板書計画が必要。 個人の活動と全体での活動のバランスを。 「今からどんな活動をするのか」の指示を的確に出さないと。 まとめのチェックこそ、ていねいに先生がするのでなく、生徒にやらせたい。
<ul style="list-style-type: none"> 教科名の一覧表が必要だった。 授業で使う記号を習慣化させるためにも、ある程度のもは教えるべきだ。 最上級と共に使う、in～と of～の図を用いての説明は、先生自身がよく消化しておりわかりやすかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の板書のチェックをすること。 すぐに質問の答えを与えるのではなく、生徒自らが答えを求められるように、ヒントを出してやる手だてがいる。 初出のものの中に、板書の助けのいるものがあつたのでは？
<ul style="list-style-type: none"> 先生自身の旅行体験を生かし、時差の表現なども取り混ぜて、興味のわく内容だった。 地球儀なども理解の助けになったのでは？ I do my homework. から、He does his homework. を目指すには、どうすればよいのか。He do my homework. で止まっている生徒がほとんど。 生徒にとっては初めての人名、地名等を oral で示す時は、文字の助けもある。 ビデオの中で台詞を確認したのはよい。 	<ul style="list-style-type: none"> プリントの扱いに時間がかかりすぎた。宿題にするなど、臨機応変の対応がいる。 50分講義をした形になってしまった。 ビデオのせりふは長くて、生徒に注意してほしい箇所の焦点がぼけてしまった。見る前に情景説明をいれたり、聞きとってほしい表現をなんらかの形で示す工夫がいる。 ビデオを見せるだけで終わったのは残念。生徒にさせたかった活動は何だったのか。 本を読みながら、机間巡視する余裕がいい。
<ul style="list-style-type: none"> 生徒に自分なりの訳をさせたのはよかった。 ビデオの中で実際のせりふを確認できたのはよかった。(興味づけ) 進行形を理解した上での授業だったか？ Be 動詞のあとに一般動詞がくることに対する生徒の不安や揺れを予想していないから押えが弱く、定着していない。 	<ul style="list-style-type: none"> 何をさせたいのか、指示をはっきりと。 生徒の質問の意図をつかみきれていない。 発音のしかたのアドバイスがわかりやすい。 グループごとの活動を生かした。 とっさの判断で、ペア練習を組み込んだが効果的だった。 先生自らが演じれば、生徒も感情移入をする、というよい手本だった。

批評会結果 ○○教生 平成5年11月9日

【授業者反省】

- ・元気にやりたかったので、声を精一杯大きくしてやったが、そのために発音が悪くなってしまった。
- ・ペアワークやノートをとる時間をきちんと設定してやらせればよかった。
- ・生徒の質問を予想してなかったので、確信の持てないまま答えてしまった。

【観察者反省】

- ・板書計画がされていたのだろうか。こだわってもいないようだったが……。
- ・ノートを書き終えた生徒への次の指示もあとよかった。
- ・リピートの回数は、どのように決めればよいのだろうか。(以下略)

【指導教官コメント】

(略)

実習期間が短いため、一人あたり2時間分までの記録であり、また、実習開始前に本調査について指示をしていなかったため、日記研究本来の資料と見なすことは難しいが、2週間の実習体験を通して実習生の授業に対する視点の変化を見るための資料として利用することは可能であろう。

3. 分析方法

分析方法として、筆者らはまず、日誌の記述を特徴別に簡略化して抽出し、列挙した。分析にあたっては、qualitativeな方法を採用し、あらかじめ分析視点の設定は行わなかった。当初は各実習生の2週間の変化を見ようとしたが、実習体験時間が短いため、観察者の反省意見を総合し、その推移を見ることにした。この中には複数の教育実習生の意見が混在しているが、グループとしてどのように視点が変わったのかを分析することにつとめた。

4. 結果と考察

i) 教育実習期間における授業観察の視点の変化

分析の結果、本研究における教育実習生の授業観察視点を次の4つに分類することにした。

A 指導過程(授業の流れ)に関する記述

復習から展開・整理に至る指導過程全体の流れ、指導過程間のつながり、に関する指摘

B 生徒観(生徒への指導的評価、声掛け)に関する記述

生徒の言動、行動、反応および生徒に対する指示、援助、評価など学習者に対する関わりについての指摘

C 教材研究、教具の利用に関する記述

言語材料、教科書など教材一般に対する指摘

D 指導技術に関する記述

具体的な指導技術や教材・教具の使用に関する指摘

さらに、教育実習生の日記の記述方法についても失敗、成功などの事実の記述、それに対する原因の分析、さらにそれについての評価・批評、最後にそれらに対する改善の方法、といくつかのパターンを見いだすことができた。分析の結果から得られたこのような視点のそれぞれについてその具体例となる指摘をA、B、C、Dの記述別に列挙しながら、視点の変化の推移を得られた資料からまとめていくと前頁の表1のようになる。

ii) 考察

2週間の教育実習を通して、実習生の授業観察の視点はいろいろな変化を見せる。その原因として、大学において教師前教育を通して受けたもの、実習校での指導教官の授業参観及び指導、さらに何よりも実際に1学級の生徒とのインターアクションを通して得られた経験、と少なくとも3つの要因が考えられる。以下では、考察として11人の実習生の授業批評日誌に見られた記述の中から見られた変化をまとめていくことにする。

まず、第1に全体的な視点として、前述の4つの視点のうち、C、Dの視点、つまり教材の研究・解釈、及び指導技術的側面に大きな関心があることがわかる。そこには全体の授業の流れよりは、自分の予習にもとづくシナリオを順にこなす態度がうかがわれる。第2に、日誌の記述の方法にも特徴が見られる。「……していた」と事実情報および感想に留まっている「記述・感想型」から、「なぜ……なったのか」と原因を究明しようとする「分析型」へ、そして、分析に基づいてどのようにその場面に対処すべきだったのかを考えようとする「問題解決型」へと発展していくと仮定すると、多くの記述は、特に実習当初を中心に印象的価値判断を中心とした「記述・感想型」が多く見られる。第3に、視点Bにあたる生徒への指導的評価の視点が最も欠落している。しかしながら、実習期間中に最も伸びるのがこの視点である。

第4に、教材解釈・研究に対して生徒不在であるように見受けられる。教材研究が教師のための学習に終始して、生徒からの反応を予測した上での教材研究にまで至っていないのが感じられる。最後に、授業後の実習生の授業批評および実習指導教官の指導助言が、すぐ翌日の授業に生かされているという実習生独特の考え方の柔軟さ、あるいは個・グループとして成長していく姿が視点の変化から明らかになった。

5. 教育実習生を対象とした今後の日記研究の課題

今回の日記研究を通して、大まかではあるが前述のような問題点や特徴が浮き彫りになった。これらの中には、実習校での経験を通して研鑽されるもの、あるいは学部での教師教育プログラムに含まれるべきもの等がある。教育実習をより有意義なものにするためにも、学部・附属の共同により日記研究の結果を英語科教師教育の中で活用していく必要がある。今後の課題として、本格的な日記研究のためには、事前に日記の記述のための様式を設定しておくこと、後の授業の自己反省のためにも、授業者が日記をつけるための時間を授業直後に確保すること、日記をもとにした事後指導によりフィードバックを図ること、が望まれる。

V. 終わりに

本研究の動機は、教師教育プログラムに教育実習批評日誌がどのようにフィードバックできるのかを考えることにあった。実習生および指導担当者の時間と労力をかけて行われる教育実習をより効果的にするためにも、実習の反省・日誌は単なる報告書として終わらせるのではなく、将来の教師としての成長にフィードバックするための貴重

な記録として、今後、実習後の事後指導に活用していく必要がある。

参考文献

- Alderson, J. (ed.) 1985. *Evaluation*. Pergamon.
- Baily, K. 1983. Competitiveness and anxiety in adult second language learning: looking *at* and *through* the diary studies. In H.W.Seliger and M.H.Long (eds.), *Classroom Oriented Research in Second Language Acquisition*. Newbury House.
- Bailey, K. 1990. The use of diary studies in teacher education programs. In J.C. Richards and D. Nunan (eds.), pp. 215-226.
- Bartlett, Leo 1990. Teacher development through reflective teaching. In J. C. Richards and D. Nunan (eds.), pp. 202-214.
- Jarvis, J. 1992. Using diaries for teacher reflection on in-service courses. *ELTJ*, 46, 2, 133-143.
- McDonough, J. 1994. A teacher looks at teachers' diaries. *ELTJ*, 48, 1, 57-65.
- Murphy-O'Dwyer, L. 1985. Diary studies as a method for evaluating teacher training. In J. Alderson (ed.), pp. 97-128.
- Richards, J. C. and D. Nunan (eds.) 1990. *Second Language Teacher Education*. Cambridge University Press.
- Richards, J. *et al.* 1992. *Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*. New edition. Longman.
- Thornbury, S. 1991. Watching the whites of their eyes: the use of teaching-practice logs. *ELTJ*, 45, 2, 140-146.